



H A R V A R D | B U S I N E S S | S C H O O L

Funai Overseas Scholarship 第3回報告書

武田悠作
ハーバード大学経営大学院
www.hbs.edu/ytakeda
6/26/2017

5月をもって春学期が終わり、大学院の学期内での活動は一回りした。現在は私用によりミュンヘン近郊の田舎町でつかの間の休日を過ごした後、本拠地マサチューセッツ州ケンブリッジ市で夏休みを楽しみながら研究に勤しんでいる。

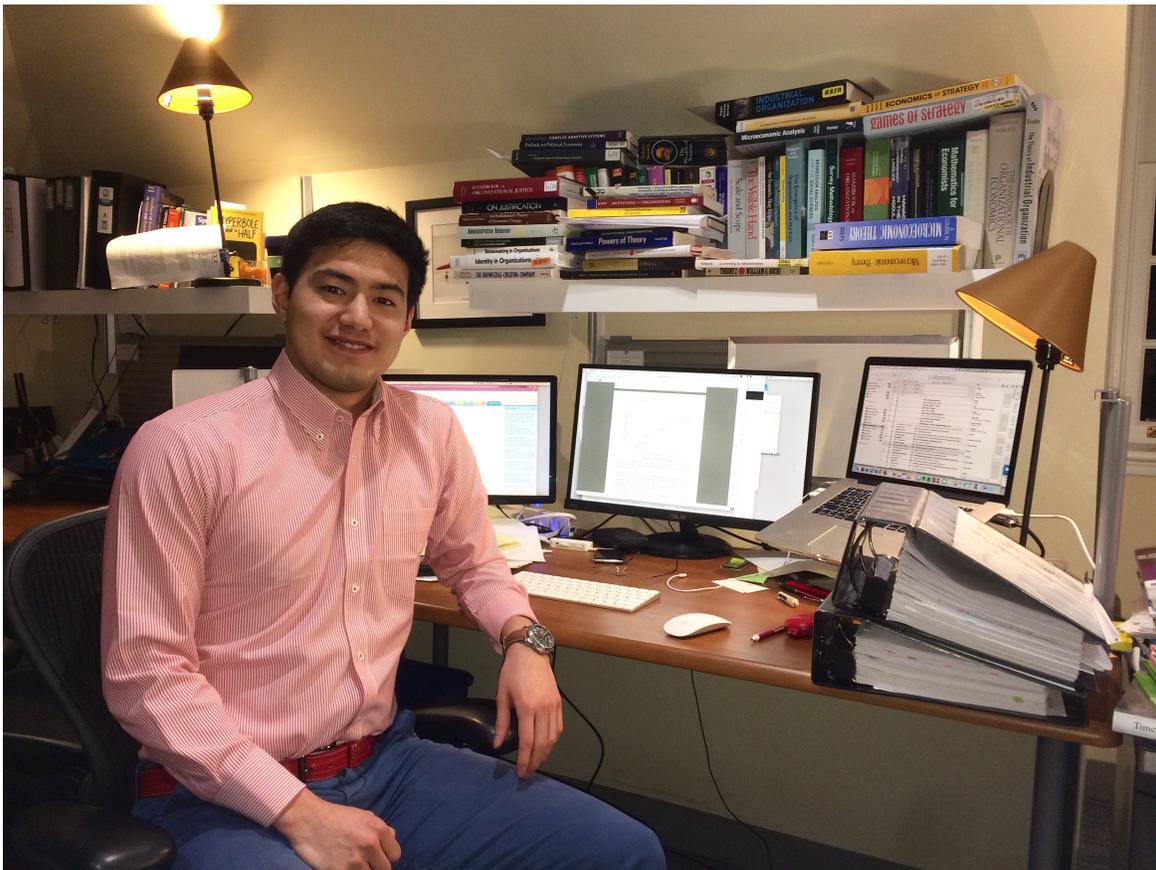


冬の経営大学院

学問について

今学期は非常に学びの多い、充実したものであった。秋学期は比較的淡白に感じたのに対して、ヨダレが出るくらいの楽しい毎日であった。今学期が充実したものに感

じた理由は主に2つある。1つ目は、単純に大学院での生活に慣れたこと。生活習慣に関する事柄もそうだが、様々な研究科に属す教授、そして経営大学院のみならず他学部や研究科に属する大学院生と顔見知りになったことが大きい。それぞれのコミュニティーのノームやコミュニケーションのパターンなどを理解した。2つ目は、私自身の研究に直結する分野の理論セミナーばかりを今学期に履修したことがある。先学期はミクロ経済学やミクロ組織行動学といった、自身の研究に関係するが直結しない分野や、数量研究法など研究手法のコースを履修したこともあり、内容としては淡白な印象を受けた。それに反して、今学期は研究興味に関連するセミナー等を集中的に探し求めた。経営大学院どころかハーバード大学までも飛び出し、ボストン大学(Boston College)の博士セミナーまで履修するに至った。これが功を奏し、学内にとらわれず、私の分野の権威といわれる教授と非常に仲良くなり、また、所属枠にとらわれず共通する興味を持った博士課程の学生に囲まれて幸せな生活を送ることができた。今学期作り上げた人脈は私の学者としてのキャリアにおいて、長期的にとっても有益なものになるだろう。おかげで、研究、専門知識、人脈、全ての側面において、ハーバード経営大学院の同級生より頭一つ分くらいリードしたのではないかと、毎日の会話や研究の進み具合などから感じる(競争しているわけではない)。

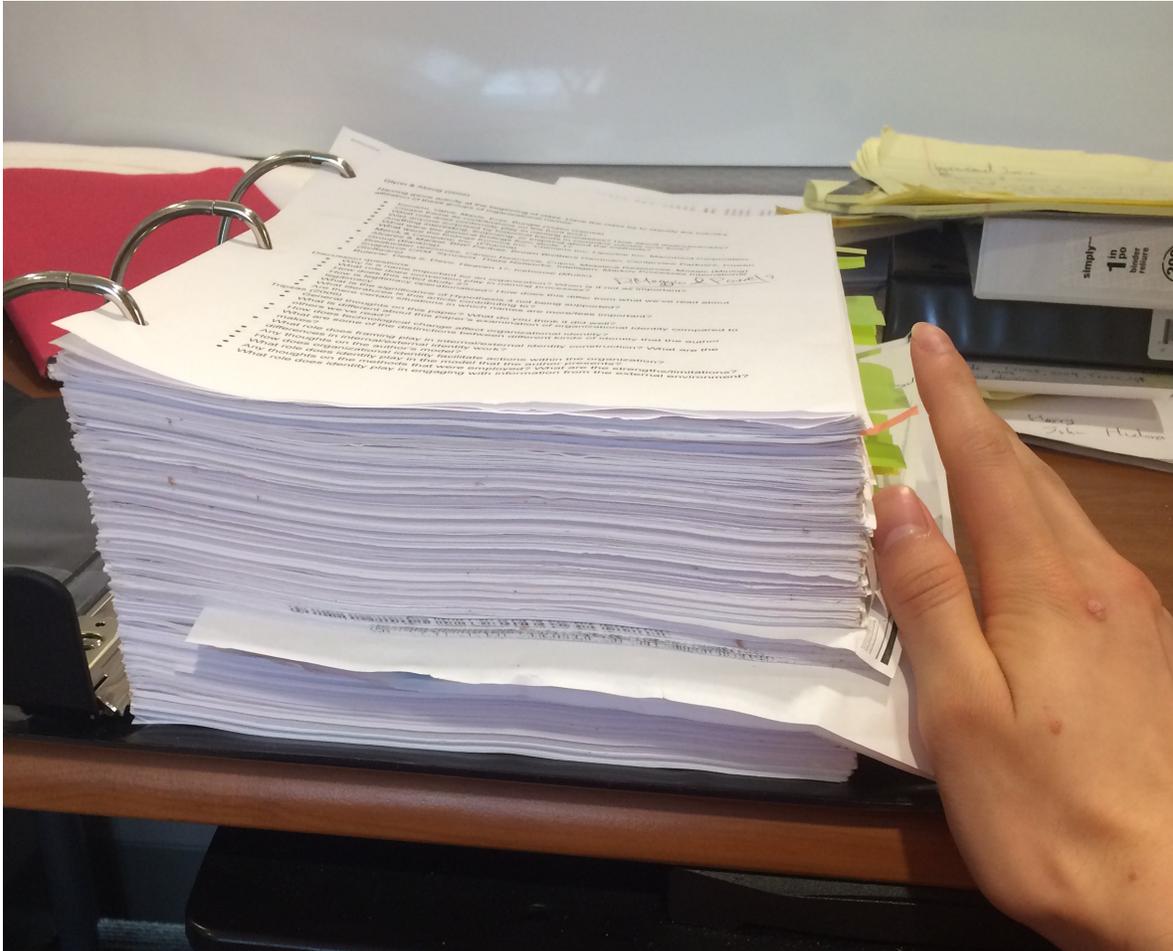


1年共にしたデスクともお別れし、来年度から別の建物に引っ越す。

具体的に以下のクラスを履修した。：

1. 社会認識論セミナー (PhD Seminar in Social Cognition)

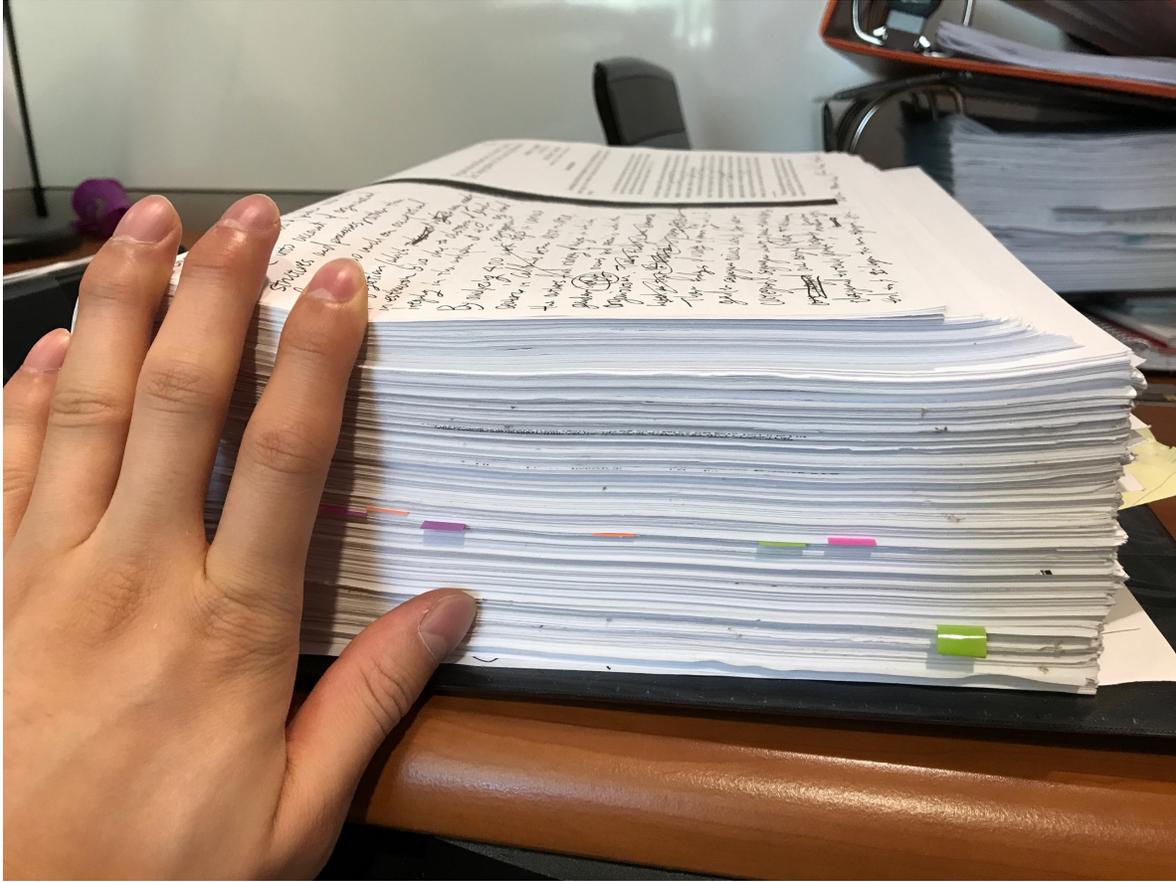
世界最大規模の経営学学会の Academy of Management の次期代表が教鞭をとる、ボストン大学(Boston College)の PhD プログラムの名物セミナー。合計10人くらいの規模で行われた。ハーバードからの私に加えて、ボストン大学(Boston University)からも2名が参加した。課題読書である論文の量と求められている精読の質が高く、非常に良いセミナーであった。教授と意気投合し、非常に良い関係を築くことができた。



社会認識論セミナーでの既読論文。すべて隅から隅まで精読した。

2. 組織分析セミナー (Organizational Analysis: Seminar)

ハーバード社会学部の組織論の名物教授が担当する組織論のセミナー。社会学部や経営大学院の博士学生のみならず、政治学や教育政策などを専門とする博士学生も参加した。全体的に難易度はそれほど高くなく、非常に楽しく学期が去っていった。



組織分析論セミナーでの既読論文の一部。

3. 社会調査法 (Graduate Practicum in Social Survey)

政治学研究科と経営大学院が共同で運営している、社会調査法についてのワークショップ。同じ研究手法でも政治学と経営学では期待や主流の方法などが微妙に異なり、非常に勉強になった。政治学の博士学生と知り合うことができたのもこのワークショップから得たものの1つだ。

最近思うこと

研究者として米国に滞在することにより、学部時代とまた違った日本人の方々に会う機会が多々あり、最近新たな日本の課題が見えてきた。それは「グローバル」に対する日本人の意識である。明治維新後の開国、第二次世界大戦後の開国に次いで、第3の開国と言われる今日、「カネ」や「モノ」ではなく「ヒト」の開国が進んでいない問題に日本は直面している。例えば、多くの日本人は、未だ日本や日本人が視点の「中心」にあり、「外」国が中心の外にあるという日本的な精神構図から抜け出せていない。私と同世代の若者のエリート層でもアジア系以外を指差しては「外人」と呼ぶ人も多数いたりする。また、「日本人」の集団としての特性を挙げ、的外れな集団的アイデンティティーを形成することで精神的安定を得ようとする日本人がいる。例えば、日本人は繊細であるとか、誇り高いとか、正直者だという主張があるが、これらは本来国レベル

で議論しても仕方がないことだ。こういったことは、国の平均レベルで差があったとしても、それはその国の政治的または経済的要因にも関連している。このような要素は個人レベルの特性であり、個人レベルで判断されるべきことだ。日本人以外の人を日本人でないというだけで、「我々が持っているもの」を持っていないとラベル付けするのは如何なるものであろう。世界は、「日本人は A で、アメリカ人は B で、中国人は C である」というレベルで動いていない。反対に、グローバル化とは真に「個」のレベルで—「人」と「人」のレベルで—交流する時代の到来を意味している。愛国心は悪いことではないが、それは集団的な優越感、その裏にある劣等感の元になるべきものではない。このような例が「ヒト」の開国が進んでいない日本を顕著に表している。



春の経営大学院ベーカー図書館

グローバル化に置いて日本に最も求められているのは「ヒト」の開国だと最近ひしひしと感じる。グローバルという言葉の意味が理解されぬまま、社会的にその言葉の正当性や価値が認められ、「グローバル」に見えることを行うこと自体が善であると見なされ、これが一大ビジネスと化している今日の日本がある。真の意味で世界で通用する人材を育成するには、日本の社会的価値観にとらわれない自由な考え方、自分で物事を批判的に考える能力と習性、そして、それを体系的に明快に相手に主張していく能力が重要だ。これらの能力を生徒に教えるためには、既存の日本の高等教育は大きな発想の転換を求められている。昨年からはじめられた船井財団による学部留学支援に選考員として参加させているが、そういった活動が今後一層重要性を増してくるのだという思いを強くしている今日此の頃である。